

アイス・エイジ
氷の絶対女王殿

永塚 紗季



1

「んん…ん」

二人だけの練習を終えた体育館。
がんばり屋の紗季には珍しく、
深い吐息をついて「へたくそと
体育座りをする。」

「今日はちよっとハードだったかな？」

2

「このくらい入っちゃらう…
と言いたいところですけど、
さすがに疲れちゃいましたね。」
そう言つてはにかんだ頬を、
玉の汗が伝う。

3

「ん、じゃあボールはオレが
片付けるからそのまま休んでて。」





1

「えと、じゃあお願いします。」
心得たとばかりに足元の
ボールを拾い上げ――

2

「…QwQ」

そのまま顔を上げると、
体育座りの脚の間から
スパッツに包まれた下半身が
モロに視界に飛び込んできた。

3

「…長谷川さん…？」

…いかん、両腿を抱え込んだ
腕の下の、ぶつくりとした
恥丘から目が離せない…

1

「あ……っ★」

オレがどこかを見ていたか
気付かれてしまったようだ。
顔を赤くして股間を
覆い隠す紗季。

2

「こ……っごめん！
そんなつもりじゃあ……」

あわてて弁明したと……して
女の子の大事な部分を
凝視していた事実は変わらない。

1
「……………」
怒るといふよりは
困ったような表情で、
紗季が上目遣いに
オレを見つめる。

2
「長谷川さんも…さっしやう
お年頃なんですすよね…」
「うん？」
「あうあ…いいいやまあ…★」
バツの悪さも手伝って、
否定も肯定もできずに黙りこもった。

3
「…トキのじまじもあんな目で
見てるのかしら……………いいなあ…」
「……………」
もぐもぐと何かを呟いたよう
だったが、うまく聞き取れなかった。



1

「——長谷川さんに見られるのは……
イヤじゃない……ですけど」

耳を疑うような言葉に
顔を上げると、おずおずと
左手を元の組位置に戻す
紗季の姿があった。

2

「……トモには悪いけど、私だつて少しくらい」

さつきから小さな弦きの中に
智花の名前が出てくるのは
気のせいだろうか。
いやツツコンではいけない
というのは理解しているが。

1
少なくとも罪悪感を
伴いながら、再び
目に入るとところとなった
紗季の恥丘を見つめる。



3
紗季の赤らんだ頬と、
アイガード越しの潤んだ瞳が
いつそこの興奮を誘った。
「——触ってみても……いいっわ。」

1

「……は……は……う……
どうぞ……」

戸惑いを見せつつも、
ほとんど間を置くことなく
承諾してくれた。

2

「……あ……」

壊れ物を扱うように、
ゆつくりと布越しの
恥丘に指を伸ばす。

触れた瞬間、いっそう
頬を赤らめた紗季が、
切なげな吐息を
漏らした。

1

「…っん…あ…ひっ…♡」

さするよつに指を
優しく撫で動かす。
そのたびに甘やかな喘ぎが
紗季の口から漏れた。

2

「…紗季って

感度良いんだね…
ひよっとして普段から
触つてたり、する？」

艶かしい声に
煽られるように、
耳元で少しイジワルな
問いをかけてみる。

1
「わ…私だって年頃
なんですから…っ★
こっついっことこに
興味はありますっ…!」
…しまった、肯定
されてしまった。

2
—しかし怒った風ではなく、
ただ困り顔で身を預けた
ままにしてくれた紗季が
とても愛おしい。

1

「あ…っん…!!
はっ…長谷川さんっ…
ちよっと…激しい…
かもです…っ」

「…んんん!!
…っんんん!!」



1

無意識のうちになんか強くなつていつた愛撫に気付いて手を止める。

「や……ん、いやではない……ので……その、や、やめないでください……♡」

2

言ってしまったから、自分が何を口走ったのか思い至つたらしく、羞恥に顔を赤らめる紗季。

3

「……ん、わかったちゃんと、優しくする。」

耳元でそうささやき、愛撫を再開した。

1

…ただ、紗季が
快感を覚えてるのは
一目瞭然なので、
もう少し踏み込んで
みることにする。

2

強くなりすぎ
ないように
気をつけながら、
紗季の入り口の
辺りに指を
押し込んだ。

「ふあ……っ!!
…んっ…ひゃ…
はふう…♡」



1

すっかり火照った顔の
紗季に寄り添って、
優しく、時に強めに
愛撫を続ける。

「ん……くっ……んん……
んあ……んっ……んっ……っ♡」

1

快感に耐えるように
きゅつと瞳を閉じ、
喘ぎを押し殺すように
唇をかみしめる紗季。

「…紗季？
…もつと声を出しても
いいんだよ？」

2

「…でも…そんな
はしたない…」

指に伝わるのは
すつかり湿り気を帯びた
スパッツの感触。
身体はこんなに正直
なのになあ。



1

紗季の可愛い声が
もつと聞きたいので、
少し強引に行動を起こす。

「は…長谷川さん!?
…な、なにを—」



1

脚の間に頭を潜らせ、濡れそぼった紗季のアソコに舌を這わせてみた。

2

「ふあ……っは……
ああん……っ！」

予想以上に
大きい喘ぎが
紗季の口から
ほとぼしった。
ちよま……！
さすがに
やりすぎたか？

1

紗季も慌てて口を噤む。
ちよつと恨めしそうに
こちらを見るが、
この際無視して愛撫を
続けた。

2

「あ……っ……ひゅん……っ♡
……ごんなの
ヘンタイっぽいですよ
長谷川さん……っ★」

1
こちらの意図を汲んで、
喘ぎを抑えるようなことは
しなかったが、
俺はすっかりヘンタイ呼ばわりだ。
…あなたがち間違いではないが。

2
「んあ…はあ…っ
長谷川さん…っ
はせがわさあん…っ」

高まる喘ぎに「ちりちりも
舌の動きを早める。
ちゅくちゅくと高めに
水音を立てるのは
もちろん——わざとだ。

「あ…っ♡
もおわたし…だめ…
らめえ…っ！
イツちやいそおれす…っ♡」

3
やはり「イク」という感覚を
既に知ってるんだな、と
ヘンに納得しながら、
さらに紗季を攻め立てた。

1

紗季の入り口を優しく、
それでも今ままで一番強く
刺激した瞬間——



1

「んあ……っ♡

ふ……あああんっっ!!」

ひとときわ高い嬌声を上げて、
紗季が身体をわたなかせ—
くたっとして膝に頭を預けた。

2

「……っは……っ
うあ……っ……はっ♡」

きゅっとして瞳を閉じて
荒い吐息を繰り返す。
…今の声が
体育館の外まで届いて
ないことを願おう。



1

多少は動悸が
落ち着いたのか、
顔を上げ、上目遣いで
オレを見る。

「…は…長谷川さんに
舐めてもらっちゃった…♡
と…トモはど…まで
いつてるのかしら…?」

2

ぼそぼそと呟く声は
ほとんど聞き取れないが、
やはり智花の名前が
出てきた気がしてイヤイヤ
これ以上は考えるまい。

「…だいじょうぶかい紗季?」

1

「あらら……
だいじょうぶなも何も……
私いま、すっごく幸せ
なんですよ？」
言葉どおり、
限りなくご満悦な表情で
首をかしげてみせる紗季。
うわなんだこれ
部屋に飾りたいw

2

「さてと——
それじゃあ場所を
替えましようか。
今度は私が、
長谷川さんを
幸せにする番です♡」

3

そう言うのと、
心なしか艶やかさの
交じった微笑を
浮かべる彼女の姿は、
まさしく——
「氷の絶対女王政」
アイスエイジ
の二つ名に相応しく
見えたのだった。

1

薄暗い体育倉庫——
どちからともなく服を脱いで、
糸纏わぬ姿となる。

2

「ふふ……♪
いまさらですけど、
少し恥かしいです★」
そう言つてはにかむ
裸身の紗季が、
実際の年齢よりも
大人びて見えた。

3

「あれ……長谷川さんの……
その——おちんちん、
ちっちゃいんですね？」
ぐは……っ!?!
「小さい」と言われて、
少なからずショックを
受けた——

1

「さっきまで
大きくなつてたと
思つたんですが…」

2

…なんのことはない、
多少落ち着いて
勃起が収まり気味な
だけのことだった。
「あ…と、
だいじよぶだよ
こんなのはすぐに——」

なにがだいじよぶ
なのかわからないが、
上から見下ろすカタチで
紗季のささやかなふくらみ
を見ていると――



1

「ふわ…ふわ」

みるみるうちに血流が集まって、
立派に(?)そそり立つ
我が息子の雄姿があった。

2

「紗季のそんな姿見せられて
こっぴつならないヤツなんて男じゃない。」

得意げに胸を張るバカ一名。

3

「は…長谷川さんたらもう…
…トモにもそんな風に言ってる
んじゃないんですか…?」

照れ隠しなのか、そっぽを向いて
またももごもごと呟く。
…やはり智花の名が
出てきてる様だが、いや、
もう気にしないことに決めた。

1

「じゃ…じゃあ、触ります…ね？」
そう言いつて、おつかなびつくりの体で
右手をペニースに添える。

2

当然ながら触るのは
初めてなのだろう、
こわごと、
あるいは興味深そうに
手を動かす紗季。

「ひゃ…!?
う、動いた…」

「…」

1

「んっ……ふっ……」

右手を根元あたり、
左手でカリを包み込んで、
一生懸命さすってくれる。

2

「わ……ぬるぬる……」

年相応な口調で、興味深々に
先走りを指に絡ませ、
さらに刺激を加えてきた。

3

「うあ……は……
……あ……う」

「……ふい……男の人も
ちやんとえっちな声
出すんですねよ」

1

そういう紗季のほうも、
気が昂っているのか、
深い吐息を繰り返している。
…それがまたペニスに
当たってなんともはや

「うっ…うん、紗季の手が…
ひんやりしててすごく
気持ちいいから…」

2

それを聞くと、心なし嬉しそうに
やさしくやさしく手で愛撫をしてくれる。

「…うっ…ちゅ…」

3

—そこであらためて目
に入ったのは、やや未発達
の小振りなおっぱい。

1

「……あ……長谷川……さん……？」
少し驚いた声を出したものの、
桃色の乳首に添えられた
オレの指を見て——

2

「……」
期待するような眼差しで
オレを見上げる紗季の姿があった。
——当然息子はガツチガチw

1

紗季の手の動きに
呼応するように、
ピンクの頂きを
優しく愛撫する。

「あ……ん……っあ……
ふあ……くうん……っ♡」

2

女の子のほうが感じやすい
と思うのは偏見だろうか、
オレの声は紗季の喘ぎにすっかり
打ち消されてしまっていた。



1

「や…んっ♡
は…長谷川さん…っ
そんなえっちな触り方
しないでくださ…っ
ああ…ん…♡」

「いやいや、紗季だって
オレのチンポ握り締めて、
すっごいエロいしこき方
してるじゃないかよ」

2

露骨な言葉で指摘されて、
恥かしげに口を噤む紗季。
それでも手を休めないで
くれるのが心底愛おしい。

3

「や…んっ…オレ…
もっ…ん…ん…」

ざわざわとこみ上げてくる
射精感を覚えながら
そう言葉を漏らした。

1

「え…あ、はいっ…♡
じゃあもう少し激しく…」

オレの言葉を汲んで、
絶頂に誘うべく
手の動きが早まる。
…勉強熱心なのは良いが、
そういう方面で発揮
されると複雑ではある。

2

「ふわ…ひゃんっ!?
はせ…がわさん…っ
…そんな摘んじやや…ですっ…♡」
強くなりすぎないように
気をつけながら、紗季の乳首を
摘み、捻り、引っ張るように刺激する。

3

「ああん…っすっいい…っ♡
自分でするよりすっごく
気持ちいいい…っ！」
…本音がただ漏れですよ…
ちくしょうすっげえ可愛いw

1

「く……うああ……
紗……季……」

「は……あ……ん……
ひ……ん……ん……」

2

駆け巡る快感に
身をまかせ、
白濁した欲望を
解き放つた。

1

「は…っ…はあ…っ」

未だ止まらない欲望が、
紗季の顔を、身体を
容赦なく汚していった。

2

「す…っ…っ…っ…っ
出ましたね…♡」

アイガードのガラス
越しにこちらを伺う
表情は、心なしか
得意げに見える。

1

「……ごめんな、
アイガード
汚しちゃつて……」
「……平気ですよ、
洗えばちゃんと
落ちますし、
それに——」

2

そう言うと、口元を伝う
精液をペロリと舌で舐めとって——

3

「汚いとも思いませんし……ね♡」
心の広い女王さまは、
さながら女神のように
柔らかく微笑むのだった。

1

運動用のマットを
ベッド代わりにして、
四つん這いの紗季の腰を
そっと抱き寄せる。

2

「じゃあ紗季……
いいい……かな？」
緊張を抑えながら
問いかけると、
キョトンとした
顔でこちらを伺う
紗季がいた。

3

「ここまで来て
イヤがるわけない
じゃないですか……。
——ふふ、
長谷川さん、けっこう
そそっかしいですね♪」
くすりと微笑む紗季。
ううむ、年上なのに
良いように扱われてる
気がする★

1 「あ……ちよつと……
長谷川さん？」

照れ隠しに
目の前にあつた
お尻を撫でてみた。
……おお？
これは思いのほか
触り心地が良い。

2 「……ちゃん……！
そんなに撫で
まわさないで……っ
ん……★」

1
「うっむ、
これほごとは…。
腰周りの筋肉は
引き締まっているのよ、
すべすべもっちりとした
このお尻の感触——」

2
「冷静に批評しないで
くださいっ—」
怒られてしまった…が、
それで引き下がる
わけも無くw

1
「どれどれ……ちよひん
失礼して——」
「んむや……」

2
紗季が引きつった
声をあげる。
それもそのはず、
柔らかなお尻の
肉を寄せて、
いきり立ったペニスを
擦り付けたのだ。

2

「そんな褒め方
されても嬉しく
ありません…っ！」
…あ、まずい、
紗季がジト目で
こっちを見てる。

1

「うおお…
すごい感触…っ♪
ぐっじょん
紗季のお尻！」
このまま
尻ズリで果てても
本望だと思った。

1

「はは……ごめんごめん、
すっかり我を
忘れちゃって——」
紗季のお尻は
先走りですっかり
ベトベトになっていた。

2

「……長谷川さんの
〈ンタイ……〉
まったくもって
返す言葉も無く……★

1
気を取り直し、
硬く張ったペニスを
紗季の入り口に
宛がう。

2
「ーじゃあ
挿入れるよ？
…痛かったら
言つてね？」
「はい…っ
大丈夫…です。」



1

「……ん」

少し待ち、
紗季が軽く息をついた
タイミンゲで――



1

「……」

2

少し強引に、
腰を押し進めた。

1
「ふあ……っあ……
んああ……！」

2

苦しげな紗季の
喘ぎが響く……が、
紗季から何も
言つてこない以上は、
このまま続ける
べきだろう。



1

「んっ...んっ...
うあ...んっ...」

2

挿入の際はともかく、
今はただ、紗季に
負担をかけない
ことだけを念頭に
少しづつ、少しづつ
膣奥へと向かう。

1
「……あ……♡」

2

やがて——ペニスの先が
壁に当たる感触を覚え、
この上なく紗季の膈内を
満たす状態となった。

1
「ああ…すこい…♡
私のお腹——長谷川さんで
いっぱいになってる…♡」

2
「紗季…平気？
苦しくないかな？」
「はい…だいじょうぶです♡
…苦しいよりもか
幸せいはいでます♡」

3
そう言つて微笑む
紗季の表情が
本当に嬉しそうに
見えたので、
オレ自身も幸せな
感情で満たされる
のだった。

1
「…長谷川さん…
動いてくださって
いいですよ…?」

2
「うん…じゃあ動くね?
痛かったらガマンせずに
言うんだよ?」
まだ痛みもある
だろうに、健気に
そう言う紗季の
気持ちを中心に
愛しく思う。

1

「……ん……ふ……あ……
く……ん……っ★」

…言ったところから
ガマンするのが
紗季の気質だと
理解しているので、
できる限り優しく
腰を動かす。

2

「ん……でし……ん……
…気持ちいいですか？
長谷川……さん……っ」
「……うん、紗季のマンは
キツキツだから、
すっごく気持ちいいです。」

3

「や……っ？
やだもっ……♡
長谷川さんたら……」
露骨な言葉に反応して
押し黙る紗季。
——いかん、こっちの
ガマンが先に限界を
迎えそうだ★

1
「ふわ……あ……
はう……っん……っ♡」

なんとか理性を保ち、
緩やかな抽送を
続けていると、
紗季の声に甘い響きが
交じりはじめた。

2
「や……っああん♡
こ……声……
出ちやう……っ♡」

……紗季も感じ始めてる
のが明らかになつたので、
腰の律動を強めてみる。

3
「ふあっ……ん
ひあ……あ……は……
長谷川さん……っ?」

1

「ごめん紗季…っ！
さっきは
ああ言っただけど…っ
ガマンしてくれると…
嬉しい…っ！」
「あ…っ謝らなくても
…いい…ですけど…っ
あ…ふああんっ…♡
ちよ…はげし…っ！」

2

欲望は加速して、
貪るよつに腰を動かす。
紗季の喘ぎが艶やかな
まま、たつたのが救いだつた。

1

「ふわは……っあうあ……っー！
すこい……っ長谷川さん……っ♡」
紗季の蜜壺を掻き回す
卑猥な音が響く。
サラサラの髪が右に左に
激しく揺れた。

2

「ち……きゅ……！
オし……ろ……ろ
限界だよ……っー！」

3

「は……いい♡
長谷川さん……っ
お願い……っー！
一緒に……！
いっしょにイッて
ください……っ♡」



1

「んあ…は…♡
ああああん…っ!!」



1

紗季の甲高い
喘ぎを聞きながら、
繋がったまま
白濁した欲望を
解き放つ――

1
「ふあ…は…っ…
んっ…はあ…っ♡」

二人して絶頂の
余韻に浸りながら、
荒い吐息を繰り返す。

2
「あ…はあ♡
お腹のなか—
すっこいあったかい…♡」

未だに繋がった
ままのそこからは、
収まりきらない精液が
あふれ出していた。

1

「その…ごめん…
なか
膣内に出しちゃって…。
もうちよつと考える
べきだった。」
「…だから
謝らないでください。
——まだ大丈夫
ですから♡」

2

…それはつまり…また
そういう大人の準備は
出来てないということ…
だろうか？
それならばひと安心—
…ていやいや！
そういう感情は女の子に
失礼だ！

3

「—それに…
そうならたら
ちゃんときーん、
取ってくださいすよね♪」
—
そう言いつつ優しげに
微笑む紗季だった—
が、その中に有無を
言わせぬ何が
秘められているのが
感じられた。
…うむ、女王陛下には
絶対服従、なのである★